

日本における家族経営の特徴および
その歴史的変動過程に関する地理学的研究

The geographical Study about the characteristic
and the historic change of Family-owned businesses
in Japan

湯澤 規子

YUZAWA Noriko

本研究では、歴史的、社会・経済的、地理的差異を視野に入れ、日本における家族経営の特徴とその歴史の変遷過程を地理学的に解明することを目的とした。既往の研究においては、伝統社会における家族を近代化過程における「制約」として捉えることが一つの結論であった。しかしながら近年、家族がもつ特質がむしろ近代化を根底で支えてきた側面もあることが再検討され始めている。本研究では家族・地域・産業の相互関係に着目した実証研究を蓄積する中で、家族を通時的に検討したうえ、時代や地域におけるその相対的意味を再検討することを試みた。

また、本研究では上記の問題意識にもとづき、地域は個々の人間活動の積み重ねの結果であるという視点に立ち、地域に暮らす一人ひとりの人間像やその暮らしのあり方を地域の問題として捉え直した。具体的には地域におけるフィールドワークを実施し、特に個人や家族のライフヒストリーを収集検討することで、統計数値などをもとに平均的に捉えた人間像というよりもむしろ、豊かな表情や心情をもつ一人ひとりの人間像の把握に努めた。これは、生き生きとした地域像を描く一つの試みであり、しばしば人間不在の学問と批評される地理学の新たな展開を意図したものである。

2007年度は主に、①千葉県銚子市における漁家および女性労働に関する調査、②山梨県勝沼地域における葡萄栽培と小規模家族経営に関する調査、③日本における複合経営と明治・大正期の副業政策に関する調査、④結城紬生産地域における小規模家族経営の展開に関する調査を実施した。

分析のプロセスで特に重視したのは次の2点である。すなわち第1点目は明治・大正期および高度経済成長期への着目、第2点目は複合的生業構造によって特徴付けられる暮らしの実像への着目である。高度経済成長期を経てサラリーマン世帯が急増する以前の日本社会において、職住が一致し、その暮らしが家族労働力

によって支えられている場合が多かった。例えば農家、漁家、小規模な商家や工場などがこれに該当し、そこでは家族構成員が総出で働く姿が一般的であった。また、一言で農家といっても、その内実には土地に依存した農業生産に加えて商業、加工業、諸稼ぎを含めた多様で複合的な経営が見いだされる。各地域に展開した家族経営に内包される様々な就業が後に、資本主義を本質とした近代化とは異なる側面から日本の経済発展を支えたという考え方は、近年、在来的経済発展という枠組みの中で議論され始めている。日本における家族制度や家族形態、暮らしの論理は、不可避免的に日本の在来工業の構造的な特徴にもつながっていると考えることができる。

2007年度の成果としては、これまで調査を継続してきた結城紬生産地域に関して、高度経済成長期の意義に再検討を加え、「結城紬生産地域の盛衰」（地理月報502号、2007年、1－4頁）として発表した。また、結城紬生産地域との比較研究となりうる事例として織物業とは生業基盤が異なる漁家調査を進めてきたが、それを「漁業集落における家族就業構造と女性のはたらき ― 銚子沿岸集落を事例として ― 」「景観形成の歴史地理学 ― 関東縁辺の地域特性 ― 」（二宮書店、2008年、207-216頁、分担執筆）として発表した。また、明治・大正期における副業調査の史料収集を継続中であり、上記の事例調査との関連を検討しつつある。